

保育における子どもの様々な姿をどう見取るか？

-パターン・ランゲージ作成過程における本質観取から-

企画・司会：天野 美和子（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター）

話題提供：今井 裕也（株式会社さくらさくみらい 保育・運営企画ユニット）

大越 絵里（さくらさくみらい 中村北園）

福田 萌子（さくらさくみらい 本町園）

指定討論：宮田 まり子（白梅学園大学）

【はじめに】

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（以下、Cedep）では、2020年12月に株式会社さくらさくみらいとの共同プロジェクトを開始し、パターン・ランゲージ（井庭, 2013）の手法を用いて、保育者の子ども理解のためのパターン・ランゲージ作成に取り組んでいる。パターン・ランゲージとは、ある事柄について、すでに豊かな経験を持っている人から「コツの抽出」をし、他の人が実践する際のヒントを言語化して提示するという、「知恵の伝承&学び」の方法である（井庭, 2013）。この作成過程では、子どもや保育者の日々の何気ない行為の本質を深く探るための対話を積み重ねて、その行為についての本質観取がなされる。本質観取とは、20世紀ドイツの哲学者フッサールが創始した現象学の用語である。菅野（2017）は、本質観取について、物事の「本質」を皆で考え、共通理解可能な言葉にして描き合っていくことであると説明している。保育の場で見られる子どもの様々な姿を目に見える表面的な行動や言葉として浅く捉えるのではなく、その行動や言葉の根底にある意味を深く探ることは、保育者の子ども理解につながる。したがって、このパターン・ランゲージ作成過程には、保育者の子ども理解を促すための働きもある。

【企画趣旨】

保育者は、日々、保育の営みの中で、子どもたちの様々な姿に出会っている。子どもたちの行動や言葉として表れる姿には、その時々の子どものための意味や思いが込められている。保育者には、その子どもたちの何気ない表情や言葉、細やかな行為を丁寧に見取り、その一つひとつに込められた意味や思いを捉えて保育を行うことが求められる。しかし、各々の保育者が自身の知識と価値観だけに頼って子どもを捉えようとすると、子どもの見取りに偏りが生じる。各々の保

育者の見取りを同僚間などで共有し、さらに対話を通して深め合うことにより、一人の保育者だけでは気づくことの難しい子どもの深い理解につながると考える。

そこで本シンポジウムでは、株式会社さくらさくみらいが運営する保育園において、子どもを見取る豊かな経験をもつ3名より、現在作成しているパターン・ランゲージの中のいくつかの場面を一例として取り上げてもらい、その場面で見られる子どもの何気ない姿とともに、その姿の本質には何があるのかについて話題提供していただく。それらを踏まえて、指定討論では、宮田まり子氏よりコメントをいただき、参加者の皆さまも交えて、子どもの姿の見取りと、その姿の根底にある子どもにとっての意味や思いについて共に考えを深める機会としたい。

【話題提供】

●自分の世界を崩されたくないという思いの表れ

今井 裕也

日々の保育において、子どもは自分が何か物を使っていたり、遊んでいたりでする場面で、他の子どもに取られたくないということを表現している姿に出会うことがある。このような姿は、乳児から幼児までどの年齢の子どもにも見られる。

たとえば、言葉の育ちが未熟で自分の思いを相手に上手く伝えることが未熟な1歳児などでは、自分が遊んでいる玩具を他の子どもが触ろうとした時に、その玩具の上に覆いかぶさるようにして、触らせないようにしたり、取られたくないという気持ちを表現したりする。また、4歳児ぐらいになると、自分の思いをある程度は言葉で伝えることができるようになるため、他の子どもに使われたくない、取られたくないという気持ちが生じた時には、その理由を言葉で相手に伝えようとする姿が見られる。たとえば、自分が製作したもので遊んでいる時に、他の子どもが遊びに加わろう

とすると、「作った人しか遊べないよ！」と言って使わせたくない、取られたくない気持ちを表現したりする。

しかし、状況によっては他の子どもに使われたり、取られたりしてしまうこともあり、その時には、力いっぱい大声で泣いたり、保育者に助けをもとめるような素振りをしたり、「イヤだ」や「ダメだからね」といった言葉で「取られたくなかった」という気持ちを表すこともある。

このような他の子どもに「取られたくない」という表現の根底には、保育園という集団生活の場で、他者に自分の遊びの世界観が崩されないようにしたいという子どもの強い思いがあり、その表れであると捉えることもできる。

●「眠い」ときに見られる子どもの様々な姿 —「眠い」は「快」なのか「不快」なのか?—

大越 絵里

保育園では、子どもたちは朝から夕刻までの長い時間、保育者や他児らと共に集団での生活をしている。決まった午睡の時間はあるものの、必ずしもその時間にタイミングよく眠れないこともあるだろう。また、その日の子どもの体調や活動状況などによっても、午睡の時間ではなく、遊んでいるときなどに急に眠くなってしまいうこともあるかもしれない。

特に乳児の場合には、言葉で「眠い」ということを保育者に伝えることが難しいため、泣いたり、ぐずったり、イライラしているような素振りを見せたりする。では、「眠い」という感覚は、子どもにとってどのようなものなのだろうか? 「眠い」という感覚は「快」なのだろうか、それとも「不快」なのだろうか? 泣いたり、ぐずったり、イライラしたりすることを考えると、「眠い」は「不快」なのだろうか? 「不快」なのであれば、保育者は、その様子にタイミングよく気づき、子どもが少しでも早く体を休めて眠ることができる環境を用意しなければならない。

一方、子どもが「眠い」ということを保育者に伝えるとき、必ずしも泣いたり、ぐずったり、イライラしたりという素振りを見せるわけではない。たとえば、保育者に抱っこを求めたり、子ども自らおんぶ紐を保育者のところに持って来たり、または、コットベッドが入っているドアをたたくというような行動で眠りたいことを保育者に知らせることもある。

保育者は、このような子どもの多様な行動が「眠い」の表現であると見取ることができているだろうか?

●知っていることは誰かに教えたいという思いの表れ 福田 萌子

子どもは日々、園の環境の中で様々な物や出来事に出会い、そこに興味・関心を向けている。幼児期の子どもは、自分のアンテナを目一杯張り巡らして周囲の環境から、いろいろなことを知ろうとしている。そのようにして見つけたり、気づいたりして自分が知り得たことを、保育者や他の子どもたちにも知らせようとする姿がしばしば見られる。

たとえば、ある時、5歳児クラスのA児は、給食を食べている時に歌を歌っていたB児に対して「歌は心の中で歌うんだよ」と注意する姿が見られた。これは、食事中に声を出して歌うと行儀がわるいということを知っているA児の規範の意識が「歌は心の中で歌うんだよ」という言葉に表れていると見取ることができる。

また、言葉の発達が未熟な0歳児の場合には、園のインターホンがなると、「あ!」と声を出し、インターホンの方を指をさして保育者に教えようとしたり、2歳児では、救急車がサイレンを鳴らして走っている音が聞こえると、玩具の救急車を保育者のところに持って来て見せるというような姿も見られる。

このように子どもは自分が「知っている」ことがあると何らかの行動や言葉で表していることが分かる。その根底には、「知っていることを誰かと共有したい」「役に立ちたい」「知っていることがすごいと思われたい」という思いがあるのではないだろうか。

【指定討論】

宮田まり子氏は、2019年にCedepと慶應義塾大学の井庭研究室との共同で制作したパターン・ランゲージである『園づくりのことはば-保育をつなぐミドルリーダーの秘訣-』(井庭他, 2019)のプロジェクトメンバーである。保育に関わるパターン・ランゲージの制作に関わった経験と、保育者の子ども理解を深めることについての専門的な視点からのコメントをいただき、本シンポジウムにおける議論を深めたい。

【引用文献】

井庭崇 (2013). 株式会社クリエイティブシフト HP 「パターン・ランゲージとは」
<https://creativeshift.co.jp/pattern-lang/>
(情報取得日 2021. 08. 15)

苦野一徳 (2017). 『はじめての哲学的思考』 ちくまプリマー新書

井庭崇・秋田喜代美・野澤祥子・天野美和子・宮田まり子 (2019). 『園づくりのことはば-保育をつなぐミドルリーダーの秘訣-』 丸善出版